

## 徳島県下の讃岐式アクセントにおける 動詞アクセント体系について

上野和昭

キーワード：讃岐式アクセント・動詞アクセント体系・類推・有核化・型の統合

### 0. はじめに

徳島県の西北部から香川県の大部、さらに愛媛県東部におよぶ地域には、讃岐式と呼ばれる方言アクセントが聞かれる。これらの地域に共通するアクセント上の特徴は、二拍名詞の5類の類別が1・3/2/4/5のような合同のしかたをしていることであって、従来、瀬戸内地域を中心として詳細な研究がなされてきたが、四国山地に広がる徳島県下のそれについては話題に上ることも少なかった。かつて森重幸(1958)によって山城谷や出合に、それぞれ二拍名詞が1・3・5/2/4、1・2・3/4/5という、讃岐式の下位変種と考えられる類別体系の存在することが報告されたが、それらをまだ音調的変種の段階にあるとする見解もある<sup>(1)</sup>。

ところで、これら地域の高年層に聞かれる動詞アクセント体系の系譜を考えるには、まず香川県下のアクセントの分布と系統を論じた金田一春彦(1965・66=1995)や玉井節子(1965)を参照すべきであるが、のちに確認された下降式音調を考慮して考えを進めれば、また新しい視点も生まれてくる。このことについては、早く上野善道(1985:240)が「一般に、讃岐式内部では用言のアクセントに大きな差がある。下降式に着目しつつ諸活用形を詳しく調べる必要がある」と注意を喚起された。同じ下降式をもつ加賀北部地域については、すでに新田哲夫(1988)もある。しかし、讃岐式地域の動詞アクセント体系そのものが問題とされたことはなかった。筆者の実際に調査したのは徳島県下に限られているので、考察もその範囲を中心に西讃岐を参照する程度ではあるが、ひとまずこの地域の体系を比較して、それぞれの成立経緯を考えたい。

もちろん動詞体系の比較から考えられる祖体系は、名詞についてなされたものとは趣が違い、音韻変化に加えて類推(体系的強制)による類全体の置き換わりを大きく考慮しなければならない。また、ここでは比較する地域の範囲も狭く、違いもさほど大きくはないから、結果として得られた体系も、下降式音調がすでに存在する段階にまでしか及ばない。そこで、これを祖体系と呼ばずに、「前体系」という用語を用いることとした。また本稿では、アクセントの高拍を●、低拍を○、下降拍を●で、また下降式音調の中高拍を◎であらわす。

本稿で述べようとする要点は、以下のようである。

まず、動詞音調体系の比較から讃岐式の「前体系」を考える場合は、それを観音寺型とほぼ同じものとして済ませるわけにはいかないということを言いたい<sup>(2)</sup>。最近、三拍名詞第5類が近畿中央式で古く○○●であったのに対して、讃岐式地域で●○○であったり●●◎であったりして対応の明確でないことが指摘されているが<sup>(3)</sup>、動詞体系の側から見た場合、近畿中央式で古く○○●型の三拍動詞「余る」類の終止形について、観音寺や池田などに聞かれる●●◎を「前体系」の中に設定するより、●○○を考えた方が説明に都合がよいように思われる。少なくともこの地域の動詞については、このように想定したい。

つぎに、ここで扱う讃岐式アクセントの多くには、下降式音調に有核化が一様に起こり、さらに型の統合が起こっていること、上野善道(同:246)に詳しい。その過程で、動詞体系は大きく二つの類型に収束していく。金田一(1965・66)では、このような類推変化を音韻変化に比して軽視し、例外の説明にのみ利用したが(上野善道1988:51)、こと動詞の音調体系を考える場合には扱いが異なるように思われる。単に連用形に類推したというようなことではなく、体系内の類型として、問題となる活用形がどのような音調型をとるべきなのか、という観点から考察されてよいと考える。

さらに、筆者の調査によれば、従来讃岐式とは別系統の「垂井式」とされてきた東祖谷山村の最も奥に位置する、名頃地区の高年層に聞かれる音調は、山城谷式と共通するところが多い。この地区の方々は何代か以前に、北の山城谷式に近い地域から移住してきたと伝えられ(『ひがしいやの民俗』1990)、隣の菅生地区から「ことばが違う」と指摘されてもいる。ここでは、名頃地区の動詞に聞かれる音調が、山城谷式の古い姿を残してはいないかと考えてみた。

なお、動詞の種類については、終止形の拍数とその類別・活用により、二拍動詞第1類(一段活用)や三拍動詞第2類(五段活用)などを、2V1(1)や3V2(5)などと略記する。ただし2V1・2(1)については、それぞれサ変・カ変を含む。考察の対象とするのは2拍と3拍の動詞で、これを類別と活用の種類により10種類に分け、終止形(言い切り)・過去形(連用形+タ)・否定形(未然形+ン)を比較する<sup>(4)</sup>。

## 1. 池田型の動詞アクセント体系

徳島県三好郡池田町など同県西部の美馬・三好郡の北半に聞かれるアクセントは、香川県観音寺市などの、いわゆる観音寺型とほぼ同様である。これを本稿では池田型とよぶ。池田型の動詞アクセント体系を以下の(1)に示す。もちろん部分的な個人差はあるが、ほぼこれが典型的な体系であろう。2V1(1)の過去形「着た」は、キータ●○○と3拍に実現する方が普通(以下省略するが、ここに扱う他の地域も同様)。低起無核型は、観音寺(上野善道1985:240)新居浜(中井幸比古1986:123・129)など早上がりとされる。大和(1990b)に示された「白地型」も同様。そちらの方が一般的か。

この体系には、二つの類型が認められる。すなわち、一方は終止形L0型・過去形L2型・否定

形L0型(2V2(5)過去形「書いた」などが○○●に間かれるが、これは音便形をとったための変容で、もともとは●○○)、他方は終止・否定形が下降式無核で、過去形が1拍めに核を持っている。これらをそれぞれ0型、1型と呼ぶ。

ところで、3V2(1)「落ちる」類の終止形と否定形は、近畿中央式では○○●から●○○に、そして現在ほとんど○○●となっているが、古く○○●であったものは、讃岐式では原則として●●◎と対応するとされる。池田型の終止形・否定形の○○●はそのような対応からすれば例外となる。とすれば、何らかの類推(体系的強制)の力が働いた結果として、現在のようになっていると考えるのが順当であろう。そうであるとすれば、その力は3V3(5)の過去形「歩いた」などのL2型と、3V2(1)の過去形「落ちた」などのL2型とが一致することから、終止形や否定形も同じ2V2(5)や3V3(5)のL0型に類推したとみて誤るまい。金田一(1995:184)では、オキテ・ニゲテなどへの類推と説かれるが、ここに働いた力はもっと大きな背景をもつものとする。

(1) 池田型アクセントにおける動詞の音調<sup>(5)</sup>

	終止形	過去形	否定形
2V1(1)	●◎	●○	●◎
2V2(1)	○●	●○	○●
2V1(5)	●◎	●○○	●●◎
2V2(5)	○●	○○●	○○●
2V3(5)	●◎	●○○	●●◎
3V1(1)	●●◎	●○○	●●◎
3V2(1)	○○●	○●○	○○●
3V1(5)	●●◎	●○○○	●●◎◎
3V2(5)	●●◎	●○○○	●●◎◎
3V3(5)	○○●	○●○○	○○○●

この3V2(1)の終止形・否定形が、その元において●●◎であったか●○○であったかについては明らかでないが、筆者は●○○であったらと推定する。その理由は次節に述べる。

また、3V1(5)と3V2(5)とが合同していることにも注意が要る。これらは3V2(5)の連用形などにあった●●○など2型が●○○などの1型と統合した結果、類の合同をみたものと解釈できよう。

## 2. 讃岐式の動詞アクセントにおける「前体系」の推定

京都方言の場合、近世後期以降現代までの間に、3V2(1)が3V3と、続いて3V2(5)が3V1(5)と合同して、その結果、終止形で言えばH0型とL0型というアクセント上の二類型に再編を逃げるのであるが、池田型の場合も結果としては同様な姿を見せている点に注目される。前節に説明したように3V2(1)は3V3(5)の側に類推したようであるし、また3V2(5)も3V1(5)と全く同じである。このことは、京都に起こった変化とほぼ同じ過程を想像させる。

もちろん、筆者のように3V2(5)の終止形をもと●○○であったと考えずに、それを●●◎とし

て、はじめから3V1(5)と同じであったと推定しても、その限りでは矛盾は生じない。3V2(1)についても、終止形・否定形ともに●●◎、過去形○●○という状態から、2V2(5)や3V3(5)に類推して、終止形と否定形が○●○になったという説明も一応は成り立つからである。

しかし、ここに丸亀型の体系(2)があることにも注意しなければならない。丸亀型は、同じ香川県の三野町や徳島県側の池田町出合に聞かれるものに近いが、動詞体系からみると、終止形はそれぞれ3V1(5) ●○○、3V2(5) ○●○として現われる(過去形も3V1(5) ●○○○に対して3V2(5)の方は○●○○であって一致しない)。同じ●●◎から変化したとするならば、同様の道筋をたどって同じ音調に落ち着いていてよさそうなものであるのに、そうはなっていないところが問題であろう。

丸亀型は、観音寺型の下降式無核に、まず有核化(●◎>●○、●●◎>●●○)が起こり、さらに2型と1型とが1型に統合(●●○・●○○→●○○、●●○○・●○○○→●○○○)して成立したものと解釈できるから、動詞アクセントもその流れに沿っているはずである。しかし、実際にはいくつかの例外が指摘できる。

まず、2V2(1)の終止形と否定形が●○であることが問題になる。観音寺型も池田型も○●である。これは連用形を用いた過去形などを介して、2V1(1)へ類推したものと考えられる(金田一1995:189)。三野町でも、佐藤栄作(1986:137・158)によれば、否定形「見ん」は○●、●○両様という。

(2) 丸亀型アクセントにおける動詞の音調<sup>(6)</sup>

	終止形	過去形	否定形
2V1(1)	●○	●○	●○
2V2(1)	●○	●○	●○
2V1(5)	●○	●○○	●○○
2V2(5)	○●	○○●	○●○
2V3(5)	●○	●○○	●○○
3V1(1)	●○○	●○○	●○○
3V2(1)	○●○	○●○	○●○
3V1(5)	●○○	●○○○	●●●○
3V2(5)	○●○	○●○○	●●●○
3V3(5)	○●○	○●○○	○●○○・○○●○

丸亀型の場合、2V2(5)の過去形は本来○●○として体系を考えると分かりやすく、また2V3(5)は揃って1型を保ち、2V1(5)と一致する。ところが、3V2(1)は3V3に倣ってしまっている。丸亀型では、観音寺などで○●●などL0型が、○●○などL2型に対応している点が気になるが、これも金田一(同)が述べるように、連用形と同じ型に揃えたものであろう。それにしても、3V2(1)は「近畿中央式(古)○○●：讃岐式●●◎」という対応規則からすれば本来、終止形●●◎、過去形○●○、否定形●●◎であってよかつたはずで、現在○●○になっているのは、3V3などの

側への類推以外に説明のしようがない。過去のある時点に何らかの契機があって、低起式の類型に倣おうとする力が働いたと一応は考えられる。

しかし、3V2(5)も対応規則どおりならば、終止形も否定形も●●◎であったはずのもので、むしろ3V1(5)と同一の動きを見せてよかったのである。それがなぜ3V3(5)と同じ○●○になっているのであろうか。これは難問で、前提である対応規則をそのままにしておいたのでは、どうにも解けそうにない。ここは「近畿中央式(古)○○●：讃岐式●○○」としてみる必要がある。少なくともこれらの地域で動詞体系を考える場合には、こういう対応規則でなくては問題の解決を見ないであろう。そこで、前代の讃岐式アクセントにおける動詞アクセント体系は、おむね以下の(3)のような体系であったと推定する。

3V2(1)と3V2(5)とが同一歩調をとるとすれば、「前体系」の段階で3V2(1)が、2V2(5)や3V3(5)の存在を背景に、3V2(5)と終止形が同形であることなどを糸口に、連用形を用いた過去形などをL2型に誘い、さらに丸亀型では自他ともに終止形をもL2型に統一してしまった、と考える以外に方法はなかろう。金田一(1995:189)に「今のところ解釈不能」とされた問題を、一応このように説明したいと思う。だが、その契機が何であったかについては、なお考えたい。

(3) 讃岐式アクセントにおける動詞音調の「前体系」

	終止形	過去形	否定形
2V1(1)	●◎	●○	●◎
2V2(1)	○●	●○	○●
2V1(5)	●◎	●○○	●●◎
2V2(5)	○●	○●○	○●●
2V3(5)	●○	●○○	●○○
3V1(1)	●●◎	●○○	●●◎
3V2(1)	●○○	○●○	●○○
3V1(5)	●●◎	●●○○	●●◎◎
3V2(5)	●○○	●○○○	●●○○
3V3(5)	○●●	○●○○	○●●●

3V2(5)の終止形が、かつて●○○であったことの痕跡は、今回はじめて報告する東祖谷山村名頃地区の高年層にそれが聞かれることであり、また、山城谷でも3V2(5)の過去形に●○○○が聞かれるが、それらはそれぞれの箇所ですべて。また、上野善道(1988)などに紹介される北陸の下降式アクセント地域に、3V1・2(5)が分かれて出てくる場合が多いことなども傍証になりはすまいか。中井(1986:128)では、新居浜の3V2(5)終止形などの1型を近畿中央式との関係で説明しようとするようであるが、讃岐式そのもの内にあるとみることはできないものであろうか。

ところで、池田型の体系は、この「前体系」のあとに、ちょうど京都で起こった体系変化と同様な組み替えがあったと解釈すれば済む。すなわち、下降式音調の有核化が起こる以前に、3V1(5)の過去形などに聞かれた2型と、同じく3V2(5)過去形などの1型とが型の統合を起こし、それを

契機として2V2や3V2(1)・3V3(5)などを中核とした低起式動詞の類型と2V1や3V1などの下降式動詞の類型とが対立し、3V2(5)は連用形の一致から後者に類推したものと解釈できよう(上野和昭1993)。

### 3. 山城谷式の動詞アクセント体系

山城谷式アクセントの動詞の音調体系は、「前体系」の下降式無核に有核化が起こり、さらに●○○や●●○○の語頭が低下して成立したものである。

2V2(5)の過去形は非音便形の「差した」や促音便以外の「飲んだ」などは○●○、促音便形「降った」などは○○●。3V1(5)と3V2(5)の過去形は○●○○と●○○○の両様。#印のあるところには、「前体系」からすれば●○○や●○○○があつてよいはずだが、ここでは低起式の音調類型(終止形ほかL2型)に倣っている。3V2(5)過去形の1型は「前体系」の名残であろうか。山城谷式に限らず讃岐式の3V2(1)の終止形「落ちる」や否定形「落ちん」、また2V2(5)の否定形「書かん」などは、低起式の類型である3V3(5)と同じ音調型に落ち着いている。全体に低起式の類型が早く固定して勢力を張ったものと解釈できる。

#### (4) 山城谷式アクセントにおける動詞の音調<sup>(7)</sup>

	終止形	過去形	否定形
2V1(1)	●○	●○	●○
2V2(1)	○●	●○	○●
2V1(5)	●○	●○○	○●○
2V2(5)	○●	○●○	○●○ #
2V3(5)	●○	●○○	●○○
3V1(1)	○●○	●○○	○●○
3V2(1)	○●○ #	○●○	○●○ #
3V1(5)	○●○	○●○○ (●○○○)	○●○○
3V2(5)	○●○ #	○●○○ #(●○○○)	○●○○ #
3V3(5)	○●○	○●○○	○●○○

ところで、この地域に聞かれる二拍名詞について、第1・3類と第5類とはまだ完全に合同してはおらず、池田型などの音調的変種であるという調査報告がなされている(前出)。そのことからすれば、3V1(5)の過去形○●○○も、もとは●●○○であるから、3V3(5)の過去形とは音調的には似ていても、まだ完全には低起性を獲得していないとも考えられるし、あるいはすでに両者区別のない状態になっているのかもしれない(この点については調査不十分)。もしこれらに区別がないとすると、山城谷式の動詞体系は池田型を経由して成立したかとも考えられようが、3V1・2(5)の過去形は一旦●○○○に落ち着いたのに、また動き出すというのは、説明として苦しい。

また、3V3などの終止形も否定形も0型ではなく、2型になっているから(これも連用形に倣ったか)、いずれ式の区別をなくせば、1型と2型それぞれを基調とする二つの類型にまとまること

になろう。

同じ山城谷式でも美馬郡一宇村周辺の動詞アクセント体系<sup>(8)</sup>は、一部山城町のものとは異なり、3V1(5)以下の否定形が○●●○になる。○●○は変わらない。

#### 4. 三好郡東祖谷山村名頃地区の動詞アクセント体系

同じく山城谷式と考えられるものに、四国山地の奥地、東祖谷山村でも最も奥の名頃地区がある。この付近は、いままで東の木頭村、西の西祖谷山村と同様に、二拍名詞1・4/2・3/5という類別体系の地域とされてきた<sup>(9)</sup>。しかし、今回その地の高年層を調べてみると、讃岐式と考えられる音調を聞くことができた。

この地区は人口も少なく(調査時150人ほど)、伝統的アクセントを若年層が受け継いでいくことなどは難しい状況にある。働き手は多く仕事を村の中心部などに求めている、子供も中学生になれば東祖谷中学校、一校に通うことになる。1997年度名頃小学校の児童数は6名。この土地では林業のかたわら、山間に農業を営んできたが、近年国の営林土木事業に参加したり、観光関係の仕事に就く人もいるという。

アクセントが讃岐式だと言っても、完全にその性質を備えているとは言い難い。ここでは動詞の体系を論じているので概略を述べるにとどめるが、一拍名詞第1・2類に一般の助詞付きで●○が聞かれる。二拍名詞第1類は単独で○●と○●の両様。語頭の低起性も曖昧で、一般の助詞が付いて○●○・○●◎・○●●三様であるから、末尾の高さも保たれないことがある。しかし、中野寛氏が、ご家族の中野カネミ氏(菅生出身)と比較されながら、「名頃のアクセントはこうだ」とご教示くださったのは、単独で○●の形である。単独で○●、助詞付きで○●○が伝統的な音調なのであろう。ただし語頭の低起性は保証されない。第3類も調査語彙の3割弱には、第1類と同様の音調が聞かれる。ほかは●○、●○○となる。母音の広狭や無声化などの問題ではない。第3類の多くが1型をとるのは、他地域の影響か。語によっては「山」などは「名頃では●○ではなくて○●だ」と注意しながら、すぐあとで●○と発音してしまうこともあった。名頃ヨシエ氏は「米」を●○というのはシモ(下=祖谷川下流)の人たちで、名頃では「米が」○●○だと明確に教えてくださった。他の類は、近辺の地域と同様である。

さて、動詞については以下の(4)のとおりである。

2V1(1)などの諸活用形の●○は、讃岐式によく聞かれるもの。下降式無核●◎からの有核化による。2V1(5)否定形の○●○は、完全に語頭が低起性を帯び、かつ第2拍に核があるかどうかはなお疑問で、もとは3拍の下降式無核の音調の一つ。このような音調傾向は、山城谷や一宇村のものとも共通する。2V2(5)の終止形○●●はもちろん、過去形の○●●と○●●も本来の低起であって、後者はもと○●○から高さを後ろに送ったもの。否定形は難しいが、●○○は類推以前の「前体系」にあったもので、○●●と○●●は3V3(5)の否定形などに聞かれるL0型に類推したと

みて誤るまい。2V3(5)の否定形は●○○が本来で、○●○は2V1(5)に倣ったもの。○●●は、2V1(5)否定形などと同様に3拍下降式無核の音調の一つ（有核化が不完全なもの）であるのか、それとも2V2(5)や3V3(5)の否定形などに聞かれるL0型か確認できないが、おそらく前者であろう。後者とすれば、類推の方向が珍しい。3V1(1)の終止形と否定形の○●○は、●●◎からの音調的变化を経ている。

(4) 名頃地区における動詞の音調

	終止形	過去形	否定形
2V1(1)	●○	●○	●○
2V2(1)	○○	●○	○○
2V1(5)	●○	●○○	○○○
2V2(5)	○○	○○● ○○●	●○○ ○○● ○○●
2V3(5)	●○	●○○	●○○ ○○○ ○●●
3V1(1)	○○○	●○○	○○○
3V2(1)	●○○ ○●○ ○○● ○○●	○○○ ○●●	○○●
3V1(5)	○○○ ●●○ ○○●	●○○○ ○●○○	○○○○ ○●●●
3V2(5)	●○○ ○●○ ○○●	●○○○ ○●○○	●○○○ ○●○○
3V3(5)	○○● ○○●	○○○○	○○●●

さて、3V2(1)以下はさらに難解であるが、讃岐式の「前体系」から体系的強制の力が働いて組み直されつつあるとみるのがよいと思う。3V2(1)や3V2(5)の終止形に聞かれる1型は、近畿中央式で古く○○●であったものと対応する型であると考えられ、ここ名頃にそれが残っているものと解する。もちろん、3V2(1)終止形・否定形の○●●や○●○はL0型で、2V2や3V3の側に類推したもの。そのような流れは他の地域にも見られる。ここで面倒なのは○●○であるが、これは●●◎からの音調的変種か、3V1(1)と混同したのか、あるいはまた連用形に引かれたのかは不明。同じく3V2(1)の過去形○●○は本来のL2型ながら、そこに現れる○●●は2V2(5)の「書いた・読んだ」などの○●●に倣ったと思しい。間を跳んで、3V3(5)は型が明確で順にL0・L2・L0型となっており、低起式動詞の典型的な姿を見せる。2V2(5)や3V2(1)とともに体系内の一類型をなしている。もう一方には、下降式無核からの変化形を終止形・否定形にもち、過去形は(-3)型を基調とする体系がある。そのような環境において、ちょうど3V1・2(5)は、両者の力が拮抗する場となった。「前体系」は以下のようなものである。山城谷式の音調傾向を( )内に示す。



	終止形	過去形	否定形
3V1(5)	●●◎ (○●○)	●●○○ (○●○○)	●●◎◎ (○●○○)
3V2(5)	●○○	●○○○	●●○○ (○●○○)

有核化が不完全であったり、低起性がおぼつかない状況で、この両者に混同が起り、さらに連用形○●○の音調的類似を契機とした、低起式動詞の体系への心理的な力が働けば、3V1・2(5)終止形○●●や否定形の○●●●は現れやすい。もっとも、これは●●◎や●●◎◎の音調的変種かもしれない。いずれにも連用形○●○（過去形としては○●○○）が聞かれ、本来は3V2(5)にしか聞かれるはずのない●○○○が3V1(5)にも現れるのは、両者の間に懸隔がなくなりつつあることを物語るだろう。しかし、3V1(5)の終止形は断然○●○ないし○●●であり、3V2(5)は●○○が支配的であるから、「前体系」の差はまだ保存されている。過去形も○●○○：●○○○の対立が一応見て取れる。3V1(5)否定形の○●●●は第一類型●●◎◎の音調的な変化か、第二類型へ類推したのか不明である。しかし、3V2(5)の否定形は「祈らん・歌わん・延ばさん」など○●○○が多く、「分からん」は●○○○、「拝まん」は、日常的でないからか、両様聞かれた。全体に、まだ動きがはっきりとしない。

ここでは、以上のように名頃の動詞音調の体系を解釈するが、二拍名詞第3類と同様に近辺のアクセントが影響したのではないか、という疑念もある。讃岐式の変種と見るにしても、有核化も十分に進んではないと解釈しなくてはならない箇所もある。また、3V2(5)の終止形などに●○○○の古形を残すのは、祖谷大部の影響とも考えられはする。しかし、2V1の終止形などが●○になるのは讃岐式に特徴的な音調であるから、上述の推定が正しいとすれば、名頃は動詞体系としてみる場合、「前体系」に近く、山城谷式の方へ進もうとした段階であると言える。

## 5. 出合式の動詞アクセント体系

出合式については、すでに丸亀型を検討したところでも考察したが、下降式無核に有核化が起り、さらに1型と2型とが統合したものとされる。「前体系」にそのような操作を施すと、ほぼ出合の体系と同様なものが出来上がる。ただし、対応しないところもあって、2V2(5)の否定形は●○○が期待されるが、○●○で実現するのは、すでに述べているように、この体系における低起式類型の典型である3V3(5)の否定形などに倣ったものである。3V2(1)の終止形と否定形も同様である。もし、「前体系」においてこれらが●●◎であったとしたら、当然有核化と型の統合とによって、●○○になっていてよいところである。もちろん、そのように推定した場合でも、その後現在までに○●○に類推したと考えればよいのであるが、その立場はいまとらない。3V1・2(5)も、連用形は1型に一致して、それを契機に両者合同しただろうから、「前体系」における終止形と否定形が●●◎または●●◎◎であっても、現在の形に至りつくことにはなる。ここでは3V2(5)の方は、もと終止形●○○、否定形●●○○であったと推定する。3V2(5)の否定形に○●○○が聞

かれるのは、これもおそらく3V3(5)のそれへの類推であろう。低起式類型が等しくL2型なのは、その過去形などに聞かれる型に倣ったものと考えたい。

もっとも出合式は、「前体系」から池田型の段階を経て成立したとみても説明はつきそうである。地理的にもそう考えた方がよいのかもしれない。しかし、池田型で3V1・2(5)の過去形は●○○○に型の統合を済ませているのに、また有核化を経て、別のところに同様な型の統合を想定しなければならない点、やはり不自然に感じられる。

(5) 出合式における動詞の音調<sup>(10)</sup>

	終止形	過去形	否定形
2V1(1)	●○	●○	●○
2V2(1)	○●	●○	○●
2V1(5)	●○	●○○	●○○
2V2(5)	○●	○●○ ○●●	○●○
2V3(5)	●○	●○○	●○○
3V1(1)	●○○	●○○	●○○
3V2(1)	○●○	○●○	○●○
3V1(5)	●○○	●○○○	●○○○
3V2(5)	●○○	●○○○	●○○○ ○●○○
3V3(5)	○●○	○●○○	○●○○

この出合式と似る体系が、香川県側では丸亀市と三豊郡三野町などに聞かれる。丸亀は事情が少々違うことすでに述べたが、佐藤栄作(1986)に掲載された資料から判断するに、三野町の場合は、動詞アクセント体系の成立経緯を考察する上では、徳島県側の出合式と同じに扱うことが許されよう。

## 6. おわりに

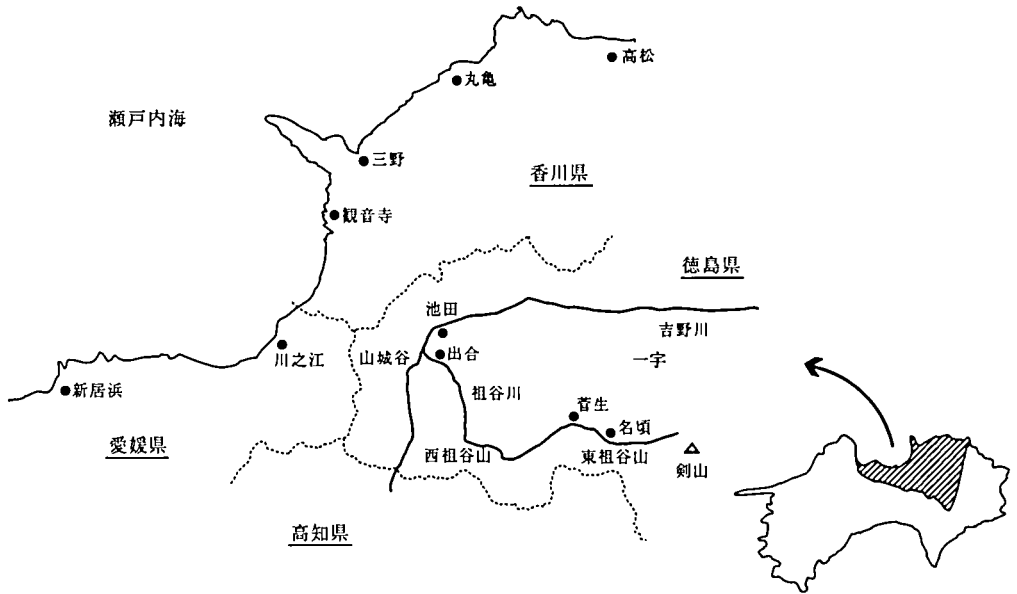
以上、徳島県側の讃岐式アクセントの地域に聞かれる動詞アクセント体系の成立経緯を考察してきた。従来、近畿中央式で古く○●○に対応する型は、讃岐式では●●●であるとされてきたが、本稿では動詞の場合にそれを●○○として「前体系」を考えた。そこに下降式音調の有核化が起こり、出合式では2型と1型とが後者に統合して、体系の組み替えが進行した。有核化が起こらずに統合すれば、池田型の体系になる。山城谷式は、その音調に疑問も残るが、有核化のあと●●○などの2型に語頭低下が進行した。そのために、やはり3V1・2(5)の区別が曖昧になるが、それに先んじて2V2(5)の否定形や3V2(1)の終止形・否定形に低起式類型(それぞれに3V3に聞かれる型)に揃えようとする力が働いたと考えた。これらは、単なる類推というよりも、動詞体系が二つの類型に組み替わる過程として捉えられるもので、そう考えればこそ、低起式の典型として3V3に聞かれる諸形が力をもつことが分かるのであるし、もう一方において、これとは異なる一つの類型がやはり力をもつのだと理解される。

「前体系」を設定するについては、筆者が確認した東祖谷山村名頃地区の音調が参考になったが、これも近辺の「垂井式」の影響を無視しきることはできない。むしろ丸亀や北陸などに聞かれる音調から、池田型や山城谷式・出合式の「前体系」を推定し、それを出発点にして、名頃の音調を考察してみると、徳島県側の讃岐式アクセントの動詞体系の中に位置付けが可能になると考えている。

### 注

- (1) 本稿で用いる「讃岐式」その他の名称は上野善道(1985)による。山城谷式・出合式を讃岐式の低位変種とみるのは徳川宗賢(1962)が早い。これらを讃岐式の音調的変種とみるのは大和シゲミ(1990)で、森や筆者などは、名詞の場合、山城谷は音調的変種としても、出合は類の合同を逃がしているとみる。(森1991、上野・仙波・森1991、上野・森1992)
- (2) 「観音寺型」「丸亀型」などの用語も、いま仮に上野善道(1985)による。(同:244)では、名詞アクセントについて検討して「讃岐式の場合、祖形はあまり問題がなく、観音寺市とほとんど同じものを考えればよい(所属語彙の細部や用言については、今不問とする)」と述べている。一拍と二拍の名詞に限れば、下降式音調のことも含めて、本稿でもこの説に従う。
- (3) 松森晶子(1995・1997)など。本稿では、讃岐式全般にわたる祖体系を考察しようというわけではない。現在、徳島県西部を中心に聞かれる種々の動詞アクセント体系の成立経緯を検討するについて、その限りでそれらの元となった体系を求めようとするものである。
- (4) ここに掲げる徳島県側の調査資料は筆者自身によるものであるが、前後10年に及ぶものから抽出しているため、精度も調査語彙も必ずしも統一されていない。また、香川県側は金田一春彦氏・玉井節子氏・佐藤栄作氏・中井幸比古氏の研究成果に負っていることをお断りする。
- (5) 池田型は、主として山下博之氏(1932生、三好郡三好町・池田町/1995.11調査)により、高橋由彦氏(1947生、美馬郡半田町/1994.11調査)のものも参照した。観音寺型は金田一春彦(1995:179)および佐藤栄作氏のご教示による。観音寺との違いは、早上がりの問題を別にすれば、池田型の方で2V3(5)「居る」が2V1(5)「置く」類に倣っていることであって、ほかに問題はなさそうである。佐藤氏によれば、観音寺のL0型は○●●~○○●の音調という。
- (6) 丸亀型は、中井(1998)所載の玉井節子氏(1935生)のアクセントによる。このうち3V1・2(5)の否定形がともに●●●○となっているのは不審というよりない。あるいは○○●○か。
- (7) 山城谷式のうち三好郡山城町は、外峯トラノ氏(1905生、山城町小川谷/1990.7調査)、外峯久延氏(1928生、同/同)、外峯日出子氏(1934生、山城町岩戸/同)による。故森重幸氏調査の橋岡清氏(1934生、山城町尾又/1989.10調査)のテープも参照した。
- (8) 美馬郡一宇村は、藤本トミ氏(1907生、一宇村桑平/1990.6調査)、武岡輝夫氏(1926生、同村赤松/同)、河内吉明氏(1935生、同村赤松/同)、広沢三雄氏(1938生、同村広沢/同)による。
- (9) 生田早苗(1951)、森(1958・1982)など。ここでは筆者自身の調査に基づいて報告する。ただし、東祖谷山村大部のアクセントは森の報告とほぼ一致する。問題となるのは、同村東部の菅生と名頃地区である。菅生は、一拍名詞が第1・2類ともに一般の助詞付きで●○、2V1(1)も終止形ほかみな●○が普通で、この2点についてのみ讃岐式的性格をもつが、その他の点については、ほとんど木頭村や東西祖谷山村大部と同じである。菅生地区のアクセントは、尾山ヤエコ氏(1921生、同/1996.7調査)、中野カネミ氏(1929生、同/1997.8調査)、小椋照子氏(1940生、同/同)による。名頃地区は、名頃義重氏(1911生、名頃/1996.10調査)、小椋茂氏(1917生、同/1997.8調査)、名頃ヨシエ氏(1920生、同/同)、中野寛氏(1926生、同/同)による。
- (10) 出合式は、中村サダエ氏(1916年生、池田町大申/1991.5調査)、藤川輝明氏(1926生、同町大利/1991.5・8

調査)、藤邨末子氏(1926年生、同町上尾後/1991.5調査)、平岡義一氏(1932年生、同町大西/1991.5調査)、藤村美恵子氏(1937年生、同町上尾後/1991.5調査)による。ここに扱う資料は、すでに上野和昭・森重幸(1992:7-8)に掲載したものであるが、誤記などは訂正した。



#### 【参考文献】

- 生田 早苗(1951) 「近畿アクセント圏辺境地区の諸アクセントについて」『国語アクセント論叢』法政大学出版局
- 上野 善道(1985) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(1)」『日本学士院紀要』40-3  
(1988) 「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集'88』
- 金田一春彦(1965・66/1995) 「讃岐アクセント変異成立考(上・下)」『国語研究』21・22/『増補 日本語の方言 - アクセントの変遷とその実相 -』(1995教育出版)所収、引用は後者による。
- 佐藤 栄作(1986) 「香川県高瀬アクセント所属語彙(用言篇Ⅰ)」『神戸山手女子短期大学紀要』29
- 徳川 宗賢(1962) 「“日本諸方言アクセントの系譜” 試論 - 「類の統合」と「地理的分布」から見る -」『学習院大学国語国文学会誌』6
- 中井幸比古(1986) 「愛媛県新居浜市におけるアクセントの境界について」『言語学研究(京都大学)』5  
(1998ed) 『香川県方言アクセント小辞典』科学研究費研究成果報告書
- 新田 哲夫(1988) 「加賀北部地域における動詞アクセントの変遷」『日本海文化』14
- 松森 晶子(1995) 「下降式アクセントの由来と四国東北部諸方言の系統 - 3 モーラ語第5類の2種の音調型をもとにした考察 -」『東京大学言語学論集』14  
(1997) 「徳島県脇町・三加茂町のアクセントと本土祖語のアクセント体系」『国語学』189
- 森 重幸(1958) 「徳島県のアクセント概観」『国文論叢(神戸大学)』7  
(1982) 「徳島県の方言」『講座方言学8 中国四国地方の方言』国書刊行会  
(1991) 「讃岐式池田型アクセントの周辺 —— 字型二拍名詞の音調考察 ——」『阿波郷土会報ふるさと阿波』146

大和シゲミ(1990a)「徳島県西部におけるアクセントの研究」音声言語研究会発表資料

(1990b)「徳島県の讃岐式アクセント」音声言語研究会発表資料

上野和昭・仙波光明・森 重幸(1991)

「徳島県三好郡山城谷アクセントの動向 ―二拍名詞を中心に―」『徳島大学国語国文学』4

上野和昭・森 重幸(1992)

「徳島県出合アクセントについて」『徳島大学総合科学部紀要(人文・芸術研究篇)』5

上野 和昭(1993)「京都方言アクセントの廻行 ―近世後期以降の3拍動詞類推変化についての考察―」『国語学』  
172

(付記) この研究は、早稲田大学1997年度特定課題研究助成費(個人研究)課題番号97A-518によるものである。なお調査にご協力いただいた方々に厚く御礼申し上げます。